



「また新聞記者になりたい」と言っていた井上靖さんと（右奥が筆者。亡くなる9カ月前、かつて勤務していた毎日新聞大阪本社学芸部で）

著書「仕事一発見シリーズ 新聞記者」の表紙



●新聞記者として34年余り、一面コラムにも健筆を振るう

## 今、学校教育に必要なのは 伸びやかさを取り戻すことだ

【プロフィール】

毎日新聞社論説委員兼学芸部編集委員  
大阪市教育委員会委員

池田 知隆 (58)



■1969年有明工業高等専門学校電気工学科卒（最終学歴：早稲田大学政経学部政治学科卒）  
■技術分野 マスコミ（新聞記者）

取材をしていくたびに  
次々と未知の世界を知った

「ガチャ、ガチャ」。新聞社内でも聞こえてくると、歴史の大時計が時を刻んでいく音が聞こえてくるようです。「今、私たちは何ができるのか」。時代の流れを目の当たりにしながら生きていく、そんな実感が心の奥から湧き起こってきます。

私は現在、社説や一面コラム「余録」や大学や教育の問題について書いています。新聞記者になって三十四年余り、複雑多岐にわたる事件、事故の取材に追われ、鮮烈な印象が残る多くの人たちと出会ってきました。社会を震撼させたグリコ・森永事件やオウム真理教事件では、社会の裏の裏を果てしなく追いつけ、自分の無力さを思い知らされたこともあります。

その一方、企画記事の取材では、本のページをわくわくしながらめくっていく楽しさを味わいました。パノラマのように次々と新しい世界が目の前に広がり、取材はまさに（未知への扉を開く快感）です。社会学から心理学、人類学などいろんな分野について、社会

七分分を五年間で」と先生たちは熱気に満ちた授業をしていました。特に「国語」の授業では、「キユリー夫人伝」の朗読から始まったのでびっくりしました。授業中、岩波文庫を次々と読み、試験といえは、読書感想文を書くことでした。そのおかげで、本を読む楽しさにすっかり魅せられました。

自由な時間があればあったで、どう過ごすのか、悩まされるものです。私は、何かに自分の全力を投入したい、との思いでサイクリングに熱中し、三年生の夏、単独で日本一周をしました。情熱のはけ口を求めてひたすらペダルを踏み、外の世界に飛び出したのです。「自分が学びたいことをするのが一番ではないか」。いつしか、学校に合わせるのではなく、自分の関心に合わせる人間になっていました。

その後、学生会活動に関わり、卒業時には大学、それも文科系に進みました。私の場合、高専生活の「伸びやかさ」は、技術者になるために専門分野に深い関心を育むどころか、より広い視野を求めようという働き、高専の「枠」から少しずつはみ出していったようです。

の現場から臨想的に学ぶことができます。

技術者養成を目指している高専教育の側からみれば、私は高専教育の「落ちこぼれ」の一人かも知れません。しかし、さまざまな難題にぶつかって打開の道を探っていく時、どこかで若い時に技術者教育を受けた影響が及んでいると思います。

新設の高専にひかれて入学  
五年間の学生生活を満喫した

私は有明高専の二期生ですから、草創期ならではの思い出が次々と浮かんできます。

「私たちといっしょに学校をつくってみないかね」。学校をつくる。それは呪文のような言葉でした。面接の時、それまでに一度も出会ったことのない、静かな笑みをたたえた初老の「教授」にそう言いわた、私は魔法にかかったかのように「はい、進学します」と言っていました。大学でもない、高校でもない、新設の高専のほうがおもしろそう。そんな単純な理由で高専を選んだのです。

それから二十歳までの五年間、実に伸びやかな学生生活を満喫しました。「高校・大学の

無駄になることは一つもない  
何をやるうといずれは生きてくる

今、高専では専攻科が設置され、大学編入も当たり前となり、四十年前とは随分と変わりました。しかし、草創期の高専で青春時代を過ごしたことは少しも後悔していませんし、むしろ良かったと思っています。青春に何かに熱中できる時間を持ちやすいことは、高専教育の最大の利点ではないでしょうか。日本では教育改革の声がいつまでたっても絶えませんが、学校において今一番大切なことは「伸びやかさ」を取り戻すことです。私が新聞記者としてのライフワークに「教育」を選んだのも、高専で教育を受けたためだとさえ思っています。

「すべての道は天然へ。さらば、悟空よ、デタラメに行け！」

「西遊記」にこんな文句があるかどうか知りませんが、私の好きな言葉です。直線ではなくてもいい、迷ってもいい。あちこちで学びながら、自分の心の命じるままに生きてもいい、ということ。何をやるうと無駄になることは一つもないし、いずれは生きてくる、と若い人たちに言いたいですね。

われら  
高専パワー  
全開

社会で活躍する  
高専卒業生たち

われら高専パワー全開



独立行政法人国立高等専門学校機構



独立行政法人国立高等専門学校機構

## 社会で活躍する高専卒業生たち われら高専パワー全開

---

発行 2007年12月25日  
編者 独立行政法人国立高等専門学校機構  
産学連携・地域連携委員会  
「社会で活躍する高専卒業生たち」編集委員会

---

発行所 独立行政法人国立高等専門学校機構

### 機構本部

〒193-0834 東京都八王子市東浅川町701-2  
TEL：042 (662) 3120 (代表)  
FAX：042 (662) 3131

### 田町CICオフィス

〒108-0023 東京都港区芝浦3-3-6  
キャンパスイノベーションセンター 4階  
TEL：03 (5484) 6286 (代表)  
FAX：03 (3453) 7023

印刷 高山印刷株式会社  
〒113-0034 東京都文京区湯島1-1-12  
NTビル 2階  
TEL：03 (3257) 0231 (代表)  
FAX：03 (3257) 0251

---